

CLC からしだね書店便り

2026 February

no.62

2

* 今月のご案内 *

- ① 連載「焚き火牧師とノスタルジック・パラドックス・パレス」
第二回 文：大頭真一
- ② 第6回トークライブ バングラデシュ・岩本直美ワーカー活動報告会
「小さいものからくる平和」のお知らせ
- ③ 読書感想本 『人を伸ばす力』
- ④ CLCからしだね地下古書部から
- ⑤ 推薦本 『いのちのそばに 病院の子どもたちと過ごす日々』
- ⑥ 衆議院選挙が終わって…
～「命」「尊厳」そして「平和」について、本質がどれほど語られたのか？～

CLCからしだね書店では…

- ① キリスト教書だけでなく、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
- ② お洒落 でかわいい雑貨や小物もあります。
- ③ ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- ④ コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
ドリンクを片手に、本をお楽しみください。
- ⑤ 古書のコーナーもあります。ほりだしものもあります。
- ⑥ 読書会や著者を招いての講演会など、人と人が出会い、つながる「対話」の場を提供します。



CLCからしだね書店 & カフェ トライアングル
営業時間 11:00-17:00
定休日 日曜日と年末年始（※祝日も営業）
毎月第3木曜日は書店のみ営業

(前回のあらすじ)
ノスタルジック・パラドックス・パレスでクニハルさんにヘアカットをしてもらう焚き火牧師。パウロ研究の新潮流をめぐる対話も核心に。

ぼくがこんな話をクニハルさんにするのには、したごうがある。ひとつには、この人とキャッチボールをすることによって、ぼくの考えや言葉を整えるためだ。前向きな思索が不信仰呼ばわりされることの多い界限とはちがって、クニハルさんとは安心して建設作業を進めることができるのだ。

もうひとつは、クニハルさんへの伝道だ。この人にはハイ・エンドの神学の悩みを正直に打ち明けるのが、最善の伝道なのだ。ぼくは思う。求道者をあまく見てはならない。彼らの嗅覚は鋭くてごまかしをするどころ見抜く。礼儀正しい彼らはいちいち口に出したりしないが、一方でクリスチャンたちはある意味で、嗅覚がにぶっているところがある。おかしいことでもなんとなく見過ごして、呑み込んでしまうのだ。

チヨキチヨキ。クニハルさんは手をとめることなく訊ねる。

「先生、パウロ理解の枠組みの変化とは、なんですか」

に渡る反ユダヤ感情の一因となってきたんです」

チヨキチヨキ。

「これは深刻ですね」とクニハルさん。

「どうなんです」と、ぼく。

「そして、行き着いたホロコースト。そこにいたって初めて、それまでのユダヤ教理解を見直すべきだという機運が高まったんです」

チヨキチヨキ。

クニハルさんは驚かない。なまありなん、と、ユダヤ人のために喜んでるふうだ。

「ですから」と、ぼくは山口希生さんの受け売りに忙しい。

「パウロに対する新しい見方は、実は、パウロの時代のユダヤ教を問い直すことから始まったのです。いや、むしろ後者の方が根底にある問いなのでは」

チヨキチヨキ。

「ユダヤ教を問い直すことによるパウロに対する新しい見方」とな「クニハルさんは口をひく。

「それが」、ぼく。

「new perspective on Paul (Nad:パウロへの新「視点」)と呼ばれるしるべでは」

「はい、Nadと呼ばる」。

山口希生著「ユダヤ人も異邦人もなく
パウロ研究の新潮流」へのオマージュとして。

文 大頭眞一



「焚き火牧師」とノスタルジック・パラドックス・パレス 第二回

この人はいつもこうして、さりげなく核心をつく。ぼくは深呼吸して、慎重に語り始める。こういつたとき、ぼくは自分の顔の前に右手をあげるくせがあるのだが、ノスタルジック・パラドックス・パレスでは、散髪グープ(カットクロスともいう)がじやまでそうもいかない。そのことが心のどこかに引っかかりつつも、ぼくは語る。

「従来のパウロ理解というのはこうです。パウロの生きた一世紀のユダヤ教は、善行によって、義とされる、救われると考えていた。パウロはそんな行為義認と闘い、行いなしに信仰によって義とされる、救われる、と説いたのだ、と」

クニハルさんはあいづちをうつ。

「なるほど、よく聞かれますな」

励まされたぼくは続ける。

「実は、このことは大きな問題の原因となってきました。つまり」

ぼくはごくりと、のどのあたりの何かのかたまりを飲み込んだ。

「自らの善い行いによって救われようとする律法主義的なユダヤ教VS行いによらず、恵のみによる救いを提供するキリスト教という図式です。その結果、ユダヤ教は神の恵みを知らない、という見方が根を張り、それが長年

もちろんクニハルさんは、ぼくがこの場所をノスタルジック・パラドックス・パレス(NPP)と呼んでいることを知らない。

クニハルさんは、いたく興味をそられたようだ。でも、熟達の職人はハサミを持ったまま身を乗り出したりはしない。

「で、NPPのみなさんは、ユダヤ教をどうとらえているんでしょう」

クニハルさんは、いまや、ぼくのあとにシャボン塗りをはじめています。理髪師の素敵なところはヒゲをあたくくれるところだ。志賀直哉には剃刀という怖い短編があるが、クニハルさんにあごをさすってもらっていると、あの小説のようなことは決して起らないと、心から思えるのがうれしい。「では」とシャボンだらけのぼくが身を乗り出そうとすると、クニハルさんがぼくの肩を柔かく押さえて言う。

「先生、動かないでください。この続きは、顔をあたってから、冷たいものでも差し上げながらにしましょう」(つづく)

おあずしんいち

1960年神戸市生まれ。英国マンチェスターのナザレン・セオロジカル・カレッジ(BA, MA)と関西聖書神学校で学ぶ。日本イエス・キリスト教団香登教会伝道師・副牧師を経て、現在、京都府の京都信愛教会と明野キリスト教会の牧師、関西聖書神学校講師、焚き火塾代表。ドリームパーティー発起人。

読書感想本

インセンティブという毒

『人を伸ばす力』

エドワード・L・デシ、リチャード・フラスト 著

〈新曜社〉 2,640円 (2,400円+税)



最近「インセンティブ」という言葉をよく耳にするようになった気がします。本来は「人に特定の行動をするよう促すもの」という意味ですが、現在では多くの場合、「仕事や勉強に励むよう仕向けるための報酬」という意味で用いられることが多いようです。例えば、「給与に出来高制を取り入れることで、インセンティブを働かせる」といった使い方です。「飴と鞭」の「飴」にあたるのがインセンティブともいえます。インセンティブは、成果を求められる学校や企業において頻繁に用いられます。その背後にあるのは、「褒美をあげれば人はやる気をだすだろう」というシンプルな考え方です。

ところが、「外部的なインセンティブは、かえって人の意欲を低下させる」ということを実験によって示した心理学者がいます。それが『人を伸ばす力』の著者・エドワード・デシです。彼の実験は次のような手順で行われました。

- ①実験協力者の大学生を二つのグループに分ける。
- ②大学生にブロックのパズルゲームを解いてもらう。その際、ひとつのグループにはパズルを解くことに1ドルの報酬を与えるが、他のグループには報酬を与えない。

この実験の面白い所は、報酬が行動に直接の影響を与える場面(②)ではなく、報酬という要素が取り除かれた後の場面(④)に着目していることです。この時、大学生たちは実験者のプレッシャーからも、報酬による直接的な影響からも解放されています。つまり④の場面では、パズルを続けることも、実験室にあった雑誌を読んで暇つぶしをすることも、彼らの自由だったのです。

実験の結果、報酬を与えられたグループが自由時間をパズルに費やすことはずっと少なくなることが分かりました。実は彼らも、報酬を与えられる前は、楽しんでゲームに取り組んでいました。しかし1ドルという報酬が導入されると、ゲームが金銭のための手段となってしまう、それまで純粋に楽しんでたパズルを楽しむことができなくなりました。その結果、報酬の影響がなくなった途端に、パズルへの興味を失ってしまったのです。

「褒美をあげれば人はやる気を出すだろう」という発想は、専ら②

からしだね書店 第6回トークライブ

主催 社会福祉法人ミッションからしだね
TEL (075)574-2800



JOCS日本キリスト教海外医療協力会

バングラデシュ・岩本直美ワーカー活動報告会 「小さいものからくる平和」



とき: 2026年3月7日(土)
14:00~16:00
(13:30 受付開始)

場所: からしだね館1階 カフェ
京都市山科区勤修寺東出町 75

お申込み
メール: clc@karshidane.or.jp
FAX: 075-574-0025



内容

1993 年以来バングラデシュで活動し、2022 年から JOYJOY プロジェクトでプロジェクト・ディレクターを務めてきた岩本直美さんが、第 8 期の任期を終えて帰国されます。岩本さんは、JOYJOY プロジェクトで、知的障がいのある子どもたちに療育サービスを届け、孤立しがちな母親や父親がつながり、支え合える場を育んでこられました。からしだねでは、2 度目の報告会になります。世界に分断と対立が起きている今、岩本さんのお話に耳を傾け、「もっとも小さいもの」の存在によって、神様が、世界に、そして私達一人ひとりに何を語りかけておられるのか、耳を傾けたいと思います。

お申込み締め切りは2月末日

「小さいものからくる平和」活動報告会
参加申込み

- 参加形態 ※いずれかに○をしてください
- ・来場
 - ・オンライン
 - ・アーカイブ配信希望 (後日参加)

お名前:
ご住所:
電話番号:
E-mail:



ホームページからお申込みいただけます

の場面に着目しています。確かに、仕事が報酬に直結している場面に限れば、報酬が仕事へのやる気を引き出すことはあるかもしれませんが②。しかしその反面、報酬は、人に仕事そのものの関係性を失わせ、それへの興味を失わせます。しかも報酬のこの負の影響は、報酬という要素がなくなった後も持続します④。

この実験結果を説明するために、デシは「外発的動機づけ」と「内発的動機づけ」という分類を導入します。前者は、仕事そのものではなく、それによって得られる報酬（あるいは罰）を得ようと（避けようと）することによる動機づけです。それに対して後者は、仕事をするこゝと自体を目的とする動機づけ、つまり仕事そのものに内在する報酬による動機づけです。パズルゲームの実験でいえば、パズルそのものを楽しんでいるときは内発的動機づけが、報酬を得るためにパズルに取り組んでいるときは外発的動機づけが、それぞれ高まっているといえるでしょう。

外発的動機づけとは、要するに「飴と鞭」のことです。「鞭」による強権的な対応が与える悪影響は容易に想像がつきます。軍隊式の教育において、生徒たちは罰を恐れて委縮し、主体的に行動できなくなります。また、「鞭」と虐待の境界は曖昧でもあります。同様に、実は「飴」もまた、ひそかに「鞭」のような強制力を人々に行使します。しかもその悪影響の大きさも「鞭」に劣りません。しかし「飴」の持つソフトなイメージのため、人は無警戒

もそんなにな主体的な人ばかりではないし、放っておけば多くの人は怠けてしまふ。デシの指摘は正しいとしても、報酬は必要悪だ」とも考えられないでしょうか。

しかしデシによると、そのような主体性の喪失こそが、外発的動機づけに頼ることの最も大きな弊害なのです。彼は、人を外発的動機づけによって統制しようとするこゝとを「管理」と呼び、その危険性を説いていきます。子どもから管理され続けた人間は、自分の行動を管理されることに慣れてしまい、内発的動機づけに基づいた行動を取ることができなくなってしまう。つまり、「主体性がないから外発的な動機づけが必要」のではなく、「外発的に動機づけられるから主体性がなくなる」のです。

しかも「管理」は、鞭だけを使つた分かなりやすいものばかりではありません。飴・インセンティブをちらつかせ、人々の中にある無意識の拝金主義を刺激し、金銭的な価値にしか興味を持たないパーソナリティを育むような、隠微な管理も存在します。報酬を与えられた大学生がパズルへの興味を失ってしまったように、目の前の「得」ばかりを追及していると、仕事や活動、ひいては生きることそのものへの興味を失ってしまう危険性があるのです。

この本が書かれた当初（1995年）、デシの念頭にはアメリカの資本主義社会があつたはずす。彼に言わせれば、上司からの

に「飴」の戦略を使つてしまいます。デシの実験は、見逃されてきた「飴」の持つ負の影響を、シンプルな心理学実験によって鮮やかに浮かびあがらせたのです。彼は言います。

私の実験結果は、おもしろいパズルに取り組むこゝとに対して報酬が支払われ始めると、被験者はそのパズルに対する興味を失つことを示している。多くの人々がお金を稼ぐためにあらゆる種類の活動に従事するのと同様に、彼らはお金のためにはパズルを続けるだろう。しかし、彼らの活動とのかかわりは金だものとなり、手段的な性質を帯びてしまふ。そこで考えてみてほしい。活動に対する金だ手段的な関係はいわゆる「疎外」と呼ばれる心的状態の確かな兆候である。表面上無害に見える短時間の実験を通して、私が被験者たちの疎外を促進してしまつたことは事実である。もしそうであるならば、現実場面で強力な力を發揮している金銭という報酬が、人々に計り知れない影響を及ぼしていることは明らかなのではないだろうか。(36・37頁)

以上のようなデシの発見は啓発的ですが、そこから、単に「内発的動機づけが重要だ」「主体性を大切にしなければ」と言うだけでは、それは陳腐な理想論論にしか聞こえない気がします。「そ

管理を嫌い、自立と個人主義を標榜するアメリカの人々も、実はお金という「名前をもたない権威」(37頁)の奴隷だったのです。

では、私たちが今生きている社会はどうでしょうか。タイバ・コスパを無批判に意思決定の基準として採用する人を、インセンティブによってひそかに管理するのは容易です。しかも彼らは自分が管理され、主体性をなくしていることにすら気づきません。そうして管理されることに慣らされた人々は、金銭的な価値以外への興味を一層失い、一層管理しやすい存在になっていくでしょう。

インセンティブだらけの社会に生きながら、それによる巧妙な管理に気づき、生きることへの興味を失わないようにするためには、めいめいが日常生活の中で、金銭的な価値に還元されない活動や人間関係への興味を保つよう努めるしかありません。結局のところ、「他人から内発的に動機づけられる」などということは矛盾でしかないのですから。だからこそ私は、デシの次の言葉のことあるこゝとに思い出したいと思ひます。

社会的状況は、個人が自由である程度に大きな影響を及ぼすが、それが自由を決定するのではない。自由は、いつなんどきでも、個人の心理的機能の産物である。だから、自由は時々刻々に実践される。(279頁)

【書店員C】

新年になりました。あなたの抱負はどのようなものでしょうか。キリスト者にとって聖書通読と祈りは大切です。デボーション、静思の時と呼びます。今年こそ聖書通読をと思っておられる方も多いのではないのでしょうか。ところで聖書を通読するための聖書日課の本が数多く出版されています。古書部でも揃っています。これがベストという本は正直に言っておりません。あくまでも聖書を読むためのツールとお考えください。オズワルド・チェンバースの『いと高き方のもとに』（いのちのこば社）の1月は神への奉仕について書かれています。

「神への奉仕とは、神からの召しを聞いた人が、自らの意志で神に献じる愛の贈り物である。奉仕は私の性質にふさわしいものを表し、神の召しは神の性質を表している。その結果、神の性質を受けた私が神の召しを聞くと、神の御声は神と私の両方に共鳴し、両者は協力し合う。」「神からの召しの最終目標は、神が満足してくださることであって、単に私たちが神のためになにかをするということではない。私

たちは神のために戦いに遣わされるのではない。神の戦いにおいて、神に用いていただくために遣わされるのである。私たちはもしかすると、イエス・キリストご自身より、奉仕に専念しているのではないだろうか。」私の奉仕の目的はなんだろうか、自分を喜ばせるためなのか、自分が立てた目標を達成するためなのか。神の御声、神の召しを抜きにして奉仕をしていないだろうか。神と私は共鳴しているだろうか。考えさせられます。

オズワルド・チェンバースの本は彼がロンドン聖書学校で校長をしていた5年間に、聖書学校で学生たちに語った説教を妻が筆記したものです。彼は43才で召されました。本は彼の死後1927年に妻が編集して出版されました。

【書店ボランティア 水野 健】



会費正金が必要ですが、お持ちのカードで決済いたします。お支払いまでお気軽にどうぞ。



店長からお知らせ



推薦本



『いのちのそばに一病院の子どもたちと過ごす日々』
久保のどか著 いのちのこば社出版 1430円（税込）

「小児科病棟やNICUで子どもたちとご家族に寄りそってきた著者が、祈りをともにしながら子供の魂と触れ合う体験を書いた本の第二弾。今回は病院だけではなく医療従事者のスピリチュアルケア、病の中で親御さんたちが祈りに向かう様子など、周囲をもまきこんだ魂のケアの様子が書かれている。著者の友人であり元同僚として、小さな小さな赤ちゃんの魂に寄りそった伴走者としての久保のどかさんの働きを、ぜひ多くの方に読んでほしいと思っています。」

からしだね書店の応援をしてくださっている産婦人科医Kさんの推薦本です。書店に平積みしていますので、是非手に取ってお読みください。

衆議院選挙が終わって…

「命」「尊厳」そして「平和」について、本質がどれほど語られたのか？」

CLCからだね書店を運営しているのは社会福祉法人ミッションからだねです。

就労支援事業の一環として書店をはじめ、カフェ、印刷事業、配食サービス、内職作業、委託業務もおこなっています。

障害のある方の就労支援ではありますが、地域との結びつきや近隣で必要とされる役割の一部を担う形でそれぞれの事業をおこなっています。

◆書店は書籍や定期刊行物、古書等でクリスチャン個人や地域教会（近畿一円）のお役に立っていると思いますし、年に何度か社会課題をテーマにゲストを招き、トークライブもおこなっています。

◆カフェは地域のお店として近隣の方々の憩いのスペースとしてご利用いただいています。

◆印刷事業では公官庁、法人、団体、個人を問わず様々な印刷物の注文をデザインなども含

めてご依頼いただいております。これからの時期だと自治会の総会資料の印刷依頼もいただきます。

◆配食サービスでは山科・醍醐地域のお一人暮らしの高齢者宅（原則、介護認定を受けておられる方対象）にお昼のお弁当を配達し手渡しすることでお安否確認もおこなっています。

◆内職作業では市内の企業からプラスチック部品の検品と組立ての依頼を受け、こなしています。

◆委託業務は個人や事業所などいろいろありますが、例えばイチゴ農家のお手伝い、高齢者施設の入居者の洗濯物のお手伝い、個人宅のお庭の雑草引き、からだね館内の清掃など衛生環境整備もワークスの仕事として法人から発注しています。

このように福祉事業所が福祉分野の中だけで成

り立っているわけではなく、地域経済や地域生活とも深い結びつきの中で存在しており、経済活動の担い手でもあるわけです。

先日衆議院選挙でも物価高対策や経済対策について各政党が声を上げていましたが「経済」は私たち福祉施設と利用者にとって大変重要で身近な問題です。食料費や消耗品費、燃料費などの値上がりは施設の運営に多大な影響を及ぼしていますし、利用者さんの生活にも同じくです。ワークスでの工賃が、少しばかり生活に余裕を生み出していたのに、今は値上がり分を埋め合わせるにも足らないような状況です。工夫し節約して頑張っておられる方も見受けられる一方、障害特性で工夫が難しかったり、変化に対応するのが難しい方がおられるのも実態です。

ただ、福祉は経済だけで語ることができない要素もあり、経済効率からすると見合わない場合でも必要なことが存在します。「命」や「尊厳」に関わることはまさにその中心的な要素です。これ

は障害や病気の有る無しに関わらず、すべての人にとって最も大切なことですが、選挙期間中も普段でも議論や関心が「経済」に偏り過ぎていないでしょうか？

このことは政治にも強く求め、訴え続けたいことですが福祉を担う事業所にも「問い直したい」ことです。特に「命」や「尊厳」に関わることにについて「経済効率に見合わない」という理由で後回しにするような考え方に疑問を持たない、自問しない福祉従事者や福祉事業所が増えていないか？強い危機感を覚えます。

「平和」が語られる時にも人の「命」や「尊厳」が抜け落ちた議論や訴えがなされていませんか？私たちは注意深く耳を傾ける必要があると思います。

いずれにせよ、他者を批判する前に、自らに「問い直す」ことから始め、いろんな意見に耳を傾け、冷静に議論し、深く吟味した上で、更に社会に「問い直す」この繰り返しなのでしょう。

皆さんはどのように思われますか？

古書献本のお願い

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担
いただけるとありがたいです。(受付できない
ものもありますので事前にお知らせください。)



【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本(多少、書き込み等があっても、大丈夫です)
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし(料理、健康、経済等)にかかわる本
- 5 小説(人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)
- 6 漫画(人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)

百科事典・辞書・開封済みのCD・
DVD・月刊誌・週刊誌、
自分史・教会の記念誌などは
受け付けておりません

【本の送り先】

住所: 〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町75 からしだね館
宛先: CLC からしだね書店 献本係 電話: 075-574-1001 FAX: 075-574-0025
Mail: clc @ karashidane.or.jp

【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

- ①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、
献本者の簡単なプロフィールをお願いします。



【献本感謝】

宇治福音自由教会様

1月の古書の収益は36,880円でした。

【古本の売上を含む CLC からしだね書店の収益は、書店で働
く障がい者の工賃になります】献本くださった方のお名前を書店便
りにご紹介させていただきたいと思います。匿名ご希望の方は、お知
らせください。ご寄贈いただいた皆様、ありがとうございました。

編集を終えて...

◆「焚き火牧師とノスタルジック・パラドックス・パレス」の著者の大頭眞一さんは、筆がめちゃくちゃ早くて、すでに5月号までの原稿をいただいています。筆の遅い私には信じがたいことです。◆読書感想本の「インセンティブという毒」では、他者から与えられる「アメとムチ」は、人からその人の主体性(やる気)を奪ってしまうという怖いお話でした。では、信仰を持つ人の主体性(やる気)は、どこから出てくるのでしょうか? 3月7日(土)、JOCsのワーカー岩本直美さんにぜひ聞いてみたいと思います。成果や報酬の大きさではなく「もっとも小さいもの」が、岩本さんを動かし続けている……。報告会のお申し込みをお待ちしています。◆「1日に日に世界が悪くなる。気のせいかな? そうじゃない!」という朝ドラのテーマソングを聴きながら、「神様、どうかこの国をおまもりください。この国に平和をもたす小さな人々たちをおまもりください」と祈り続けています。選挙を終えて、みなさまの上に、神様の平和がありますように、切に祈ります。【店長】

【第7回トークライブの予告】

2026年5月6日(水祝) 14:00 ~ 16:00

からしだね館にて

「見えないから見えるもの、
見えるから見えないもの」(仮題)

講師 松永信也氏

網膜色素変性症により40代で全盲になった、
松永信也さん。

見えなくなってから見えてきた世界があると言
います。白杖をもってどきどき街に出かけていく
松永さんのお話を聞きます。

<まつながのぶや>

1957年鹿児島生まれ。著書に『風になってくだ
さい』『あきらめる勇氣』など

編集・発行: 社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援B型事業所からしだねワークス
CLC からしだね書店&カフェ・トライアングル

〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町75 からしだね館
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025
書店メール clc@karashidane.or.jp



CLCからしだね書店便りの
バックナンバーはこちらから